

身元不明白骨死体を遺族のもとへ

宮坂 祥夫

警察庁科学警察研究所

人が人を識別し、その人を特定するという作業は、日常生活の中で誰もがやっているごく自然で、無意識な行為である。「人」を意味するパーソンという英語は、そもそもラテン語のベルソナ（仮面）を語源としているが、我々の祖先は、おそらく、人間が生まれながらに被り続けてきた「仮面」をもって「人」を表現しようとしたのであろう。確かに、個人の人格というものとは、顔という狭い面積の中に集約されている。

犯罪鑑識の場においても、「仮面」の果たす役割はきわめて大きい。犯罪捜査での「個人の特定」とは、「仮面の特定」を意味することが多く、我々が日常行っている白骨鑑定の大半も、剥ぎ取られた仮面の持ち主を捜し出す作業といえる。この講座では、数ある骨の中から、顔が位置する「頭蓋」にスポットを当て、骨からどのように死者の身元を割り出すか、その科学的アプローチについて解説したいと思う。

白骨死体の鑑定は、まず、その性別、年齢、身長並びに死後経過年数等を正確に推定することから始まる。性別は、頭蓋のもつ形態学的な形態特徴や人類学的な計測検査のデータをもとに、おおむね95%以上の精度をもって推定がなされる。また、年齢は、頭蓋の各縫合が加齢とともに癒合・消失してゆく現象を指標にしたり、歯の減り具合（咬耗度）や歯髄腔の退縮の程度などの、いわゆる人体の生理的な退行性変化に関する形態学的所見を目安にして推定を行う。これらの検査により、その頭蓋のプロフィールが把握されると、次の個人識別のためのステップへと移る。

頭蓋のプロフィールからある該当者が浮上した場合、白骨死体の身元確認は、通常、スーパーインポ

ーズ法や生前に撮られた該当者の頭部X線フィルムや医療カルテなどとの照合によりその異同比較が行われる。スーパーインポーズ法とは、白骨死体の頭蓋とその該当者と思われる人物の生前の顔写真を重ね合わせ、両者の顔の輪郭や皮膚の厚さ、眉、眼、鼻、口唇、耳介などの顔面各部の位置関係を解剖学的知見に基づいて比較検討し、個人を同定しようとするものである。顔写真は、通常、入手が容易であることから、最も多く利用されている個人識別法である。さらに、生前に、病院や歯科医院で撮影された該当者の頭部や歯のX線フィルムが入手できる場合には、両者の間で詳細な形態学的特徴所見の照合や歯の治療所見の比較が可能となり、特に、頭蓋の前頭骨の中にある前頭洞のX線所見は、「前頭洞指紋」とも呼ばれ、きわめて高い確度での身元確認が実現できる。

一方、捜査上に該当者が全く浮かび上がらないこともある。この場合には、頭蓋の上に顔貌を復元する復顔法の鑑定が行われる。作成された復顔像は、通常、街頭ポスターやマスメディアを介して公開され、一般市民から該当者に関する有力な情報を得る目的で利用される。復顔法には、粘土などにより肉付けを行う三次元法と、頭蓋の写真上に描画する二次元法とがある。いずれも、頭顔部における軟部組織の厚さや頭蓋と顔面各部の位置関係に関する解剖学的知見に基づいて、顔を科学的に復元する方法であるが、骨形態のみから顔面各部の詳細な形状を推定することは今もってなお難しく、復顔法によって身元が判明するケースは、5%以下と言わざるを得ない。今後、さらなる研究を重ねる必要がある分野といえよう。

白骨死体が唯一の物件となる犯罪捜査では、その被害者の身元を割り出すことが事件解決の鍵となり、我々、鑑定に携わる者にとって個人識別（人物特定）こそが鑑定の最終の目的となる。そして、犯罪死体だけではなく、事件性のない白骨死体についても、

ご遺体を遺族のもとへ、一日でも早くお返しすることも我々に科せられた使命である。安全で安心な社会を築くために、日々、一丸となって活動している警察職員の現状も併せてご理解いただけたら幸甚である。